

「メリークリスマス！」

クリスマス礼拝

2022年12月25日

ルカによる福音書2：1～21

佐々木 佐余子

昨日はご一緒にクリスマスイヴの賛美礼拝を献げられて感謝でした。続いて今朝はクリスマス礼拝を献げます。このような年は珍しいのではないのでしょうか。25日が主日に当たるといのは、大抵は平日になると思うのです。来年の話をするとなんか笑うと言いますが、来年は24日が主日になり25日が月曜日になるのです。25日にどのようにするか考えてクリスマス礼拝をするのもいいかもしれませんね。

1節を読むと「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た」とあります。このアウグストゥスは、世界史の年表を見ると、丁度主イエスがお生まれになったころ、皇帝だったのです。イエス様は大体紀元前4年位に降誕されたらしいのですが、勿論諸説は様々です。2000年も前のことですから、何年何月何日に生まれたことは不明なのです。ローマ時代の教父がこれから昼が長くなる冬至をクリスマスと決めたのは、良い発想ではないでしょうか。ユダヤはローマの統治下、属州でした。皇帝アウグストゥスは税金を取り立てるため、人口調査をしたのです。人々は自分の生まれ故郷に帰ることになりました。ヨセフとマリアはダビデの家系であったので、そのころ住んでいたガリラヤ湖のそばのナザレから、かつてユダヤの王であったダビデの生まれたベツレヘムに帰ったのです。とは言っても、隣の町ではないので相当な旅をしたのです。ナザレからベツレヘムまで直線距離で120キロもあるのです。その道をろばに乗って、身重のマリアはヨセフと旅をしました。かなりきついでしょう。聖書には、さぞかし大変だったでしょう、とは書いてないので想像するほかありません。ヨセフの信仰とやさしさと知恵とある程度の財力とがなければ難しいのではないのでしょうか。夫ヨセフはマリアより大分年長ではなかったかと言われています。ですから年上の経験さがあったでしょう。ところが7節を読むと、「初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」とあります。これには驚きます。「神さま、ご自分の子供でしょう、せめて宿屋位用意してもいいのではないですか」と思いますね。でも家畜小屋はあったのです。でも、ではなく素晴らしい家畜小屋はあったのです。家畜小屋は路上より暖かいし、お酒の匂いもないし、静かだし、安心して産めたのではないのでしょうか。宿屋のおかみさんも手伝ったと思います。でもマリアは強かったですね。お産婆さんもいなくて。今だったら病院に入院して看護師さんから指導を受けたり大変な騒ぎで産むでしょう。マリアはその後7人位産んでいます。驚きです。もし、家畜小屋がなければ、外で出産しなければなりません。外気温は相当さがるので、命の危険があったのではないのでしょうか。

ルカによる福音書にはありませんが、イエスさまのご降誕には、一方では、大変恐ろしい出来事がありました。ヘロデ大王が幼児を皆殺しにした事件です。マタイによる福音書にはこの事件が書かれています。このヘロデ大王は生粋のユダヤ人ではなく、ユダヤ人と遠縁のエドム人なのです。死海の南に住んでいた民族です。元を辿ると、イサクの子どもヤコブか

ら長男の特権を奪われてしまったエサウの子孫なのです。何事も疑い深い王でした。ヘロデ大王はあらゆるものに税金をかけて人々を苦しめました。そして、ローマ政府に媚びてローマ風な建物を作ったり、異教の神々を拝むのを許可したので反感をかいました。マタイによる福音書には2歳以下の幼児を皆殺しにしたとありますが、そこに彼の残虐性が現れます。自分の王位を狙う者を抹殺したのです。昨日は「占星術の学者たちが訪れる」の箇所を読んでいただいたので記憶に新しいと思います。この3人の学者たちは日ごろから、星を研究していたのです。ある時、珍しい星を発見し、これは何か吉兆・良いことがあるしるしだと思ったのです。そして、お祝いのしるしに高価な贈り物を届けようとはるばる、今で言うとイランあたりから旅をしたのです。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた」とあります。(マタイ 2:2~3) この学者たちは純真な気持ちでした。普段見たこともない大きな星を発見して興奮したのです。きっとこれから王になれる方は良い王になるに違いない、平和の王になってくださればと祈念しつつ贈り物を捧げたのです。ところがヘロデは私の次を狙う王だと勘違いし誤ったことをしました。それにしても、一体この王はどのくらい生きられると思ったのでしょうか。この後ヘロデはすぐ死んでしまいました。殺害された幼児たちは最初のイエスさまの殉教者だと言われています。私は勝手に想像するのですが、よく宗教画を見ると赤ん坊の天使が描かれているのです。聖家族にも幼児の天使が描かれています。この幼児たちはヘロデに殺されたことを悼んで悲しんで画家がわざわざ挿入したのではないのでしょうか。人々が幼児の天使を見る度に、今は天にあって神さまと暮らしているのだと慰められるでしょう。そしてまたルカに戻りますが、家畜小屋に生まれて良かったのではないのでしょうか。もし、宿屋だったらお客さんだらけで混雑していただろうし、神さまの御子は清いところがふさわしい。底辺で暮らしていた羊飼いかけつけ、偉い裕福な知識人の3人の博士たちも星に導かれて幼子を礼拝しました。イエスさまも元気な産声をあげてお父さんとお母さんは安心したことでしょう。メリークリスマスですね。

今から100年前にクリスマス休戦があったそうです。第一次世界大戦中の1914年12月24日から25日にかけてドイツ軍とイギリス軍が戦争をしていました。この戦いは長期化して戦死者を埋葬したり、壊れた塹壕の修復をしたり戦うどころではなくなってきたので、互いに短期的停戦をしようではないかという気持ちが暗黙の内に生まれていたのです。その頃、ドイツ軍とイギリス軍はベルギーのフランドルというところまで進軍して戦っていたのです。ある日、クリスマスの朝10時ごろ、塹壕の向こうからドイツ軍がイギリス軍に向かって手を振る姿が見えたというのです。そして、お互いに次々と塹壕から出て来て自然に停戦状態になったということです。ある者は、クリスマスツリーを出したり、ドイツ語で「きよしこの夜」を歌うと、今度は英語で「きよしこの夜」を歌ったそうです。そして、お酒やたばこ、チョコレートを出しあってクリスマスをお祝いしたそうです。一時の喜びの

日でした。けれど、それを良くないと思ったアドルフ・ヒトラーは「戦争中にこのようなことをするべきではない」と叱りつけたそうです。このヒトラーは多くのユダヤ人をガス室に入れて死亡させた人です。ドイツ軍はこの後、敗戦してヒトラーは自殺しました。たとえ、戦争中でも両軍がクリスマスをお祝い出来たのは素晴らしいことです。また、ドイツ軍はプロテスタントですが、この戦争に参戦していたフランス軍はカトリックですが、従軍牧師によって共同の礼拝が行われ何と聖餐式が行われたということです。プロテスタントとカトリックと一緒に聖餐式をしたということです。けれど、あとでその話を聞いたカトリック側が大変怒り、フランス人の将校たちに厳罰を与えたそうです。この話は映画にもなりました。今でもカトリックは私たちプロテスタントのクリスチャンはミサに入れてくれません。どうしてなのでしょう。聖書の新共同訳はカトリックと共同で訳されているのに残念な気がします。カトリックはイエズスと呼んでいますが、新共同訳ではイエスとなりました。これには本当に驚きました。よく譲歩したと思います。

クリスマスは世間一般では商業主義によって祝われていますが、どこのお店もスーパーも売り上げ倍増で喜んでいるでしょう。続くお正月で活気づいています。イルミネーションも輝いてそれはそれでいいとは思いますが、クリスマスを変に世俗的に使われているようなので気になります。どうしてそのような発想になるのかわからないです。本場のヨーロッパではどうなのでしょう。私は別に経験したわけではないのですが、調べてみると大分違うようです。ヨーロッパは、12月24日は多くのお店は閉まっているようです。多分教会に行っているのでしょう。そして、家でお祝いをするらしいです。寒さの厳しいヨーロッパではクリスマスまでの4週間はイエス・キリストの降誕を待ち望む期間として各地でクリスマスマーケットを開いたり、パレードが行われたり、電飾できらびやかに飾られた移動の遊園地や屋台などが並ぶそうですが、当日25日はミサに行ったり夕拝に行ったりして厳かに静かに祝うそうです。

ルカによる福音書 2章21節に「八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である」とあります。ヨセフとマリアは敬虔なユダヤ教徒として嬰兒に割礼を受けさせました。イエスはユダヤ人として律法の下で生活されました。イエスという名の意味は<神は救いである>という意味なのです。主イエスは、神は救いであるという名の通り生涯証します。

メシアを待ち望んだ人として老人のシメオンと老女のアンナがいました。シメオンはイスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。このシメオンが霊に導かれて神殿の境内に入って来た時、マリアの腕に抱かれた幼子を見た時、この子がイエスだと悟りました。その時、シメオンは神を称えました。「主よ、今こそあなたは、お言葉通りこの僕を安らかに去らせてくださいます」と言いました。この言葉はヌンク・デミティス（シメオンの賛歌）と言われました。そして、母親のマリアに預言したのです。「この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受

けるしるしとして定められています」と言いましたが、その通りになりました。そこにアンナという名の女預言者がいました。アンナはアシュル族のファヌエルの娘で今は84歳になっていました。彼女は長らく神殿に仕えていましたが、近づいてきて神を賛美しエルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話しました。そして、聖家族はガリラヤに向かいナザレで30年の生涯を送ります。そこで幼子はたくましく育ち、知恵に満ち神の恵みに包まれて育ったと医者ルカは記すのです。ここまでならハッピーエンドなのですがね。これからは神の子の宿命が始まります。ここで終わったらただのナザレのイエスの生涯であり、後、イエス・キリストにはならないのです。でもここでひとまず、メリークリスマスです。